

〔みちくさ人生記〕 （中野二郎 青年期の自叙伝）

小学校友達は皆それぞれに希望する学校に進学したが、二郎はすぐ風邪をひいては熱を出し第一氣力がなかった。

まして将来何になろうという野心も希望も持たないままに卒業してしまったので、放ってもおけず、

父は1人くらい俺の後継ぎになるかと言って、工業学校図案科の入学試験につれて行ってくれた。

兄はすでに第八高等学校に進み、親戚一統医者が多いのでかぶれたのか糞勉の鬼と化していたが、

二郎はそういうすを見れば見るほど学校がイヤであった。

兄などよりはズツと医者 of 厄介になっていた二郎であるが、自分が医者などになりたいと思ったことはない。

近頃の試験地獄の話などきくと全く夢みたいで、すべてがのんびりしていてわけもなく入学してしまった。

席を決められて見ると、同じ学校を志望したあの田部井が遙か上位に席を占めているのに、二郎はひどく矛盾を感じた。

何だあれはと思った。

小学校を休み放題にして何も準備しなかった二郎は、自分の学力が低下していることに気がつかず、

田部井ごときが上位を占めるのはけしからぬと思った。

田部井が例の剽軽な顔でニヤニヤしていると余計癢にさわった。

ヨシッ次回の成績を見よと思った。

しかしいくら心に誓ってみても、イヤな勉強はやっぱイヤで、試験の前日にならなければ教科書を見る気がしなかった。

しかも読了に要する時間を予測して、寝る前ギリギリの時間が来なければ読めなかった。

停電でもするとことである。

ローソクを買いに走るやら独り大騒ぎをしなければならなかったが、それでも一応読

んでから寝た。

試験を了えると気になって、お互いに聞き合わせて見ると皆できたようなようすなので、やっぱりツケ焼刃は駄目かとガッカリしたが、蓋をあけてみると二郎は61人中2番の成績になっていた。

三つも四つも年上で高等小学を出たらしい大きな生徒がむしろ大勢いたが、丈の順に並べばビりに近い二郎は、2学期にはいきなり上位になっていた。

何だこれしきのことかと思った。

凡くらが多く勉強しない者も随分いたが、上位の者は右を見ても左を見ても勉強で凝り固まっていることは、ようすで判った。

しかし二郎はイヤな勉強までして席次を争う気はしなかった。

体の弱いこともあったが、コツコツ勉強する習慣を馬鹿にしたこと、小器用をひそかに自惚れていたことは二郎の一生を通じての大損であったと今では思っている。

学校までの距離が遠いので、毎朝7時前に家を出た。

烏屋筋を南に出てその頃できた電車通りの片端線を横切り、墓場の裏通りを抜けたら、池の端の原っぱを斜めに近道したり、中央線の踏切りに出て田んぼの畦道のような所でも構わず歩いたが、いくら早くても40分はたっぷりかかった。

一区間だけは電車に乗ることを許された距離にあったが、歩くことにしていたのが今考えると不思議である。

冬の朝は靴は冷たいし吐く息は白く尾を引いたが、せっせと歩いた。

総体に二郎などよりは年嵩で大きな生徒が多く得体が知れないので放課には独り鉄棒にぶら下り機械体操（鉄棒）ばかりしていた。

大車輪だけはできなかった。あとはひと通りできるようになった。

体のためによいなどと思ったわけではなかったが、歩くこととそれまであまりやったことのない適度の運動は、

しだいに体の調子を整えて、だんだん学校を休むことが少なくなっていくた。

剣道部に無理無理入れられて汗くさい面を被った時はイヤなことになったナアと思った。

ほとんどが初めて竹刀を持つ者ばかりだった。

教師が叩く場所を教えて、勝った者向いの無茶苦茶の試合が始まった。

二郎は一礼するや否や矢庭に相手のお面を殴ったら教師が勝負あったと言うので、大方自分が負けたのだらうと思って引き下ったら、

お前が勝ったのだから次のと立ち向えと言うのである。

何だかわけは判らないが無茶苦茶に竹刀を振り回していると、出る者出る者おじけを振るっているところをつけ込んでバツタバツタと、

ついに17人をなぎ倒してしまった。

こう書くと剣豪のように勇ましいが、二郎は早くやめたいと思った。

強いわけではないのに相手が負けるので叩くのを扣（ひか）えていたら18人めの奴が少し心得があつて、イヤというほどお面をとられて引き下がった。

二郎は自分が強いという評判になっているのを知ってイヤになり、それきり剣道部をやめてしまった。

ヤーメタという感じである。

2年まではいわゆる予科と称して専門の学科はないので作文などもあった。

高野山に登った時の修学旅行記を知る限りの形容詞を使って書いたら、国語の教師が「お前が書いたのではないだらう。何を見て書いたのか」と言った。

二郎は思ってもみないことだったし、正真正銘自分が書いたものなので、

返事もせずに教師の顔を見ていたら、他の生徒たちまで疑って、「白状しろよ」と弥次られた。

二郎はすべてのようすが同調できなかった。

トチという渾名（あだな）の数学の教師がいた。

生徒たちが理解力のにぶいのにいつも躍起になったが、たまたまできた二郎の答えが気に入って、

以後二郎の顔ばかり見て講義するので、二郎はまたまたそれがイヤであった。

その頃父の友人で森田吾郎という人があり、「大正琴というのを発明したから、そのうち俺がもらってきてやる」と父がいうので、

正直一日千秋の思いで待ち焦れていたが、なかなかもらってきてくれない。

さんざん催促したが駄目なので締めていたら、ある日本当に楽器を抱えて父が帰って

きた時は夢かと嬉しかった。

まだ市場にはそれほど出ていない頃で、二郎は夢中になって弾きまくったが、街中、日本中で大流行になった頃はもうすっかり大正琴に飽いてしまっていた。

一弦琴に簡単な機械的装置を加えた思いつきの、発明とはいえないようなものであったが、ちょうど洋楽が盛んになる兆を見せ初めた頃で時機がよかった。

津津浦々まで流行したらしいが、二郎はあのボタンキィを離す時のカタカタする音と、金属片で抑えられた弦が離れる時の不快な音がイヤであった。

その後この発明者はこれに味を占めて、ポルトガルマンドリンの機構を真似た住吉マンドリンだの、月光琴だの金剛琴など、

次から次へと工夫して宣伝してみたが、成功しなかった。

父の師範学校時代の友の1人で川口という人は、二郎たち一家が名古屋に出るについては一方ならぬ世話になった人で、質屋を兼業していた。

母は父の月給日まで待てぬような時は質草（になるようなものは何もない）なしで金を融通してもらっていたらしい。

一人息子は二郎より二つ年下で、素晴らしいドイツ製のハーモニカを持っていたのでよく借りて吹いた。

外人が置いて行ったという精巧なギター（当時は楽器の名前も判っていなかった）やヴァイオラダモーレのようなものがあった。

広い指板にフレットが刻んであり、高音弦が左側にあって形は大体ヴァイオリンに似ていたが、胴の幅は上部の方が大きかった。

弓もついていたがおそらく17世紀頃のものであろう。

戦災で蔵諸共灰燼に帰したのもう見ることはできない。

名古屋で名高い小松検校の息子はまた父の同窓で、川口という人と3人は共に音楽好きで時々逢っていたらしい。

父は母に内密で年末賞与で三味線を買って、友人の家に預けておき毎週ひそかに3人で長唄を習っていた。

このことがバレた時の母の怒り方は激しかった。

大勢の子供を抱えて家計のやりくりが悪戦苦闘している母にとっては、よほど腹に据えかねたことであつたとみえ、

父を罵倒したその時の言葉を二郎はいつまでも覚えている。

その三味線が残っていないのは、おそらく間もなく売り払ってしまったのであろう。

父は山間に育ち、そういうものには人一倍の郷愁を感じたに違いないと思われるのは、

三味線の一件にこりず次の年末賞与ではかなり精巧な空気銃を買ってきた。

当初二、三度眼を輝かせて雀撃ちに出かけたくらいで、結局は二郎たち兄弟のおもちゃになってしまった。

二郎はまだ学校に上っていない弟の良三をつれて雀をうちに出かけた。

池の端で銃を杖のように筒口に右手を伏せて獲物を物色していたら、急ににぶい音が生きて右手の掌にちぎれるような激痛を覚えた。

小さな良三が引き金を引いたのである。

筒口をかなり圧迫していたのでかえってよかった。

弾は将棋の駒のように先が尖っているのでひどく黒死にの傷痕が残っただけだったが、もうこりごりしてしまった。

兄は東京の大学に進み姉は豊橋に嫁いだ。

三河の国府で裁縫の塾を開いていた叔母は岡崎市外の豪農の家に再縁した。

先妻の子が6人もあるところへ行ったら叔母の気持が二郎には解しかねたが、可愛がってくれた叔母であるので時々訪ねた。

駅から二十町も歩かねばならなかったが他人の地所を踏まずに行けるという話であった。

姉むこは駅前の大きな旅館の主人であったが、二郎にとって、急に義兄になった人から、

「二郎二郎」と親しげに呼び捨てにされるのが心外であった。

姉は花子であったがそれを「おはな、おはな」と呼んでいるのも気に入らなかった。

二郎の身边は急速に様相が変わってきて、しだいに小学校時代の無邪気さを失いつつあった。

家主はまたまた家売り払ったので、また引越しをしなければならなかった。

親戚一統は皆立派な一家を構えていたが、二郎一家はしだいに隈の方へ追いや

られた。

父は8人の家族を抱えて今度は4丁目の小さな家に引越した。

かなりゴミゴミした露路の中で、この辺り小さな家が折重っていて、独得な一種の淀んだ臭気が漂っていた。

離れは祖父が建てたものなのでこれはそのままこわして庭の一隅に建て直した。

壁を塗るだけの金ができないのでとうとう荒壁のまま通したが、半世紀経った今日でも二郎は時折この部屋の夢を見ることがある。

学校では60名の生徒が機械、紡織、色染、図案の四科に分かれて専門の教育を受けたが、図案科を志望する者にロクな者はいなかった。

当初十数人だったものが卒業の時には6人になっていた。

途中でやめたり、転科したり、死んだりした。

卒業名簿を見ても修めたはずの専門のことをやっている人は教えるほどしかいない。

専門の先生は4人だったが、科長は小室という父の蔵前工業時代の同窓で学者であった。

図案学精義という自分の著書によって講義をしたが、「何々を意味する」というような直訳風の難解な文句なので、生徒たちは皆カラッポの頭を悩ませた。

何でもないことがひどく難しく言い回してあるので、試験の時、丸暗記してかかる連中は、自分の書いている答案の意味が自分でも解かっていないのである。

読書範囲が広く蔵書に埋もれて暮らしていた人で、片時も本を離さなかった。

秋田の人で興にのると学科そっちのけでズーズー弁で喋るので面白かったが、実技の方はいただけなかった。

すべて理論で割出した。

二郎が秋草を散らした模様の帛紗を描いたら「これらに用いた色を混ぜ合わせた色を地色に使うとよくなる」と言って自ら灰色を地色に塗ってくれたら、

実に汚い帛紗が出来上ってしまった。

日本画の先生はブーブという渾名（あだな）のお爺さんで、名古屋で知られた奥村石蘭の息子であった。

渾名の由来がどこから来たか知らないが、始終口の中でブブブッ言っていた。

日本画といっても手本を引き写しにするだけで、先生が見ていても皆平気であった。

図案には泥絵具を使うので、冬になるとカンカンに炭火をおこしてニカワを溶かす振りをして、あたってばかりいた。

図々しい奴はその火鉢を学科の教室に持込んで股火鉢に当りながら講義をきき、遂に見つけて大目玉を食ったりした。

石膏をモデルにしたデッサンの時間も相当にあったが、消しゴムの役目をする食パンを食べながらほとんど遊びであった。

筑前琵琶の巧みな植物の先生は「曲りくねった松の木が」と古いノートをめくりめくり、

ふしを付けたいような顔をしながら意味のない講義をした。

一流百貨店の図案部に籍のあるいい年をしたオッサンが、学生服を着て聴講生になっていた。

今日では学生のアルバイトは普通になっているが、当時はそんなのは苦学生で新聞配達くらいである。

マラソンの優勝者が新聞配達の苦学生だったので、二郎は成程と思つた。

学校では毎月のように図案の懸賞募集があった。

ポスター、ラベル、菓子、織物、あらゆるものがあつた。

専門の業者に依頼するよりもズット安上りだったし、生徒も潤つた。

1等最高5円くらいであつたが、二郎は毎回頂頭して小遣がどれだけ助つたか知れない。

あまり続くので審査員の先生が手加減して変テコなものが1位を占めることがあつたが、

二郎が腑に落ちかねてけなすと、その入賞者がひどく怒つたことを覚えている。

菓子の図案に入選して賞金をもらった挙句大阪で開かれた菓子飴展覧会を見に1泊旅行したことまでである。

思えばケチなことを喜んだものである。

兄は形原の死んだ叔父から譲り受けたヴァイオリンを弾いていた。

誰に習ったのかどうか知らないが、等曲などのヴァイオリン用にした楽譜がいろいろあつた。

二郎は楽譜は読めなかったが、耳で心覚えの曲をやたらに弾いてみた。

だんだん知らない曲を弾いてみたくなり、楽譜の下にハーモニカのような数字で略記号を書込んで、片端から弾いてみた。

休暇で東京から帰った兄は書込んだ数字を見てひどく怒った。

二郎は自分のものでないから怒られても仕方なかったが、自分の買った楽譜にはせつせと書き込んだ。

二郎は何とかして楽譜を読めるようになりたいと思って、

知っている歌の楽譜を買いあさり、音の上り下りの関係を知っている歌から判断していった。

解からないことだらけであったが、二郎の知人の中には教えてくれそうな人は誰もなかった。

二郎の学校は実業学校で音楽には無関心の者が多かったが、中には好きな者もあり、数人が言い出して、学生だけの音楽会をやることになった。

正式に習っている者は1人もなく、詩吟も出れば浪花節も出るという珍妙な音楽会だった。

二郎はすすめられてヴァイオリンで千鳥を弾いた。

松田という男とDreaming of Home and Motherを二部合唱した。

二郎はアルトの部を一生懸命練習して歌ったら、きいた人たちから二郎の歌ったふしは間違っていると批評されて、

ガッカリを通り越して腹が立ってしまった。

その頃、少年雑誌に盛んに活躍していた山田みのるという漫画家があった。

二郎はこの漫画が好きで学校の催事のポスターには盛んに真似て描いた。

運動会のポスターには畳一畳敷くらいの大作をものにし、他科の生徒が面白がって、描くところを見にきた。

このポスターは来校者がいやでもくぐらねばならない中央線の陸橋下に張られて、好評を博した。

卒業制作には古臭いとけなされながら絹本に描いた紙雛が、卒業式の日展覧に早速買手がついて、

当時の大金10円也を頂戴して、悪くないゾと思った。

卒業の時5ヵ年間の平均点数90点以上の者が4人銀時計をもらったが、二郎は辛うじて

その中に入った。

同時に機械科を卒業した田部井はすでに特許権を二つも取っていたが、2人つれだつて小学校の恩師滝口先生を訪ね、卒業の挨拶をした。

田部井はすでに将来の方向は決定していたが、二郎はまだ中途半端で腰がふわついていた。

音楽をやってみたいと父に言ってみたことはあったが、一笑に付されただけである。音楽などというものは、常識として職業の中に入っていなかった。

進学するには学力が不足していた。

体は丈夫になったが方針を持たずフワフワと卒業してしまったので、小学校を出た時と同じであった。

さして図案家になりたいと思うほどでもなかった。風のままに流れていただけである。

点火

工業学校は出たものの、二郎は格別図案家になりたいと思っただけではない。

身体が弱いので父が楽な学校を選んだわけである。

二郎にはまだ自分の志というものがなかった。

トコロテンのようにして学校を出た頃は、不思議に身体が丈夫になってしまったので、

父の同窓で親しい間柄の小室先生は、しきりに上級学校への進学を奨めた。

しかし二郎は学校はもう結構であった。

さりとて働いて早く月給取りになりたいとも思わなかった。

方針を決めかねてサテと宙に迷っていた時は、もう上級学校の試験はすんでいた。

小室先生は隣りの高等工業学校建築科の講師も兼ねていたので、二郎はこの先生の計らいで建築科の助手に入れてもらうことになった。

学生と同じように自由に講義は聴かれるので、数年勤めれば卒業生と同じように扱われるという話であった。

二郎はまたまたここでもさして建築家になりたいとも思わず、ズルズルと建築科の助手になった。

仕事としては教授の講義材料のプリントを整えたり、図書の貸出、毎月世界各国から送ってくる建築雑誌の整理などで難しいことは何もなく、小さいながら一室を与えられて暇な時間はあり余るほどあるのでやろうと思えば何でもできた。

唯一つ意外だったのは、教授たちに時々番茶を煎じて熱いお茶を出すことだった。前任者が言い置いて行ったことなので従わざるを得なかったが体のいい給仕である。

時の建築科長は鈴木という夏目漱石の義弟に当る人で、当時の名古屋の代表的な建築（商品陳列館、松坂屋など）は大方手がけたガミガミ親爺だったが、お茶の入れ方一つがなかなか難しかった。

髭を生やした前任者がお手本を示してくれた時、二郎は奇妙な気がした。

建築家になるためにお茶の出し方まで習わなければならないかと思った。

この科長は、学生でも気に入らなければ衿首を鷲掴みにして壁に押しつけ、叱り飛ばすというふうだった。

しかし講義の方は一番面白かった。

二郎は6月15日付で辞令をもらったので、月末に半月分の給料として20円もらった。

二郎はこれがかねて欲しいと思っていた鈴木製のマンドリンを、19円で買ってしまった。

まず何よりも洋服を整えなければならないところだったが、助手に規定の服装はなかったので、和服と袴で文句を言う人もなかった。

また自分の得た金で楽器を買ってしまったことを咎（とが）める人もなかった。

二郎がこの時マンドリンという楽器を買ったことは、後から考えれば二郎にとっては運命的な、宿命的なことだったと言わなければならない。

どうしてマンドリンを選んだかときかれても、二郎は答えることはできない。

強いて言えばたまたまその時、自分の持っている有金で買うことができたのがマンドリンだったというに過ぎない。

上手な演奏をきいていたわけでもない。

音楽上の知識があれば、おそらくマンドリンは買っていなかったであろう。

譜も読めなければ弾き方も判らなかったが、誰憚（はばか）るところなく、ただ音を出してさえいれば倅せであった。

(資料は中野先生より頂きました 98.5.15)